中国大陸と台湾における指示詞の対照研究
――“这、那”から見た遠近認知の相違について――

鈴　木　進　一

1．はじめに

中国大陸と台湾では、どちらも日本語の「共通語」に相当するいわゆる「中国語」を、多くの人々がコミュニケーションの手段として使用している。これを大陸では「普通話（プートンホア）」と呼び、台湾では「国語（グォユウ）」と呼ぶ。

「普通話」と「国語」とでは、発音や使用語彙の面において違いのあることは、既に周知の事実である。しかし、日常談話の基本語である現代中国語の指示詞“这、那”の使い方に関しては、同じ「中国語」を使っている両地域における違いはあるのかないのか、あるとしたらどのような違いなのか。この問題についてこれまで議論されたことがない。

まず、次のような用例を見てみよう。

a　四月が終り、五月がやってきたが、五月は四月よりもっとひどかった。五月になると僕は春の深まりの中で、自分の心が震え、揺れはじめるのを感じないわけにはいかなかった。そんな震えはたいてい夕暮の時刻にやってきた。木蓮の香りがほんのりと漂ってくるような淡い闇の中で、僕の心はわけもなく膨み、震え、揺れ、痛み

に刺し貫かれた。そんなとき僕はじっと目を閉じて、歯をくいしばった。そしてそれが通りすぎていってしまうのを待った。ゆっくりと長い時間をかけてそれは通り過ぎ、あとに鈍い痛みを残していった。(村上・下：217-218)

b　四月过去，轮来五月。五月比四月还要难以打发。刚交五月，我就不能不感到自己的心开始在阑珊的春日中摇颤。这种摇颤大体在薄暮时分袭来。在浮动着玉兰花淡淡幽香的苍茫暮色里，自己的心开始无端地膨胀、颤抖、摇摆、针刺般地痛。这时我便紧闭双目、咬紧牙关、等待这番袭击的过去，而这要花很长时间，之后还留下丝丝隐痛。(林：303)

c　四月結束，五月來臨，但五月比四月更糟糕。五月裏在春意加深之中，我不得不感覺到自己的心正開始震顫、搖擺。那震顫大多在黃昏時刻來臨。在木蓮花香淡淡飄來的幽暗中，我的心更莫名其妙地開始膨脹、震動、搖晃，被疼痛刺穿。那時候我會一直靜靜地閉上眼睛，咬緊牙關。並等那過去。花很長的時間那才會慢慢過去，之後只剩下鈍重的疼痛。(賴・下：153)

これらa、b、cの文章は、村上春樹の小説『ノルウェイの森』とその中国語訳からの引用で、aは日本語の原文、bは大陸で出版された林少華による訳、cは台湾で出版された賴明珠による訳である。下線は便宜上筆者が付けたものである。aの原文中には4つのソ系指示詞使われているが、それらをbの大陸版訳ではすべて近称の“这”を使って訳し、cの台湾版訳ではすべて遠称の“那”を使って訳している。

このような用例に出会うと、大陸と台湾では指示詞使用に違いが存在するのではないか、という疑問が起こる。本研究ではこの点に関して統計的調査を行って論じていこうと思う。

2．調査方法

指示詞使用の違いを比較する上で特に大切なことは、文脈を一定に保つことである。同じ文脈の下で中国語であるなら、近称の“这”を使っているか、それとも遠称の“那”を使っているか、或いはそれ以外の表現手段を使っているのかを比較しなければ正確な比較はできない。

そこで、文脈を一定に保つために、本研究では日本語の小説を利用した。日本語小説の大陸と台湾における中国語訳を比較することによって、両地域における指示詞使用の実態を調査することにした。

最初に取り上げた日本語小説は、村上春樹の『ノルウェイの森』である。この作品の中国語訳は、大陸では林少華の訳、台湾では頼明珠の訳が有名であり、本研究でもこの二人の翻訳を採用した。次に、『ノルウェイの森』の調査から得られた結果を検証するために、リリー・フランキーの小説『東京タワー　オカンとボクと、時々、オトン』（以下『東京タワー』と記す）と、李穎秋による大陸版訳および曹姮による台湾版訳を利用した。

調査作業は、日本語の原文の中から指示詞「これ、それ、あれ」をすべて取り出し、それらを4つの項目「これ」、「それ」、「あれ」、「その他」に分類した。ここで「その他」とは、例えば「あれこれ、どれもこれも、それぞれ、これみよがしの、これといって、…」などで、2つの指示詞が同時に使われかつ同時に使うことで1つの意味をなすものや、慣用的表現をすべてこの中に入れた。

次に中国語訳の方は、日本語指示詞「これ」、「それ」、「あれ」に対応する部分をすべて取り出し、その結果を次の4通りに分類した。

①「这」――――――対応する訳の中に“这”が含まれているもの。

②「那」――――――対応する訳の中に“那”が含まれているもの。

③「这、那以外」――“这、那”を使わずに訳されているもの。この中には、訳としては１対１に対応していないが、全体として日本語の原文に近い意味を表しているものも、省略されずに訳し出されていると判断し、この分類に含めた。

④「無対応」――――日本語の指示詞に対応する部分が訳されていないもの。

３．調査結果の全体像

3.1　日本語指示詞の使用状況

日本語指示詞「これ、それ、あれ」を調査した結果は表１で、それをグラフで表すとグラフ１のようになった。日本語指示詞は「これ、それ、あれ」の３系統が均等に使われるのではなく、中称の「それ」が一番多く 77% を占め、続いて近称の「これ」が 17%、そして遠称の「あれ」が一番少なく 4% であった。

3.2　中国語訳の内訳

日本語指示詞「これ、それ、あれ」の中国語訳を、大陸版訳と台湾版

表１　日本語指示詞の内訳

日本語指示詞	使用数（割合）
これ	230（ 17%）
それ	1043（ 77%）
あれ	62（ 4%）
その他	22（ 2%）
合計	1357（100%）

グラフ１　日本語指示詞の内訳

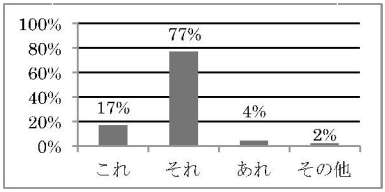
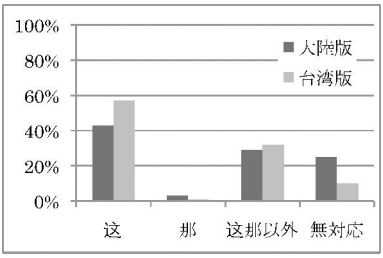


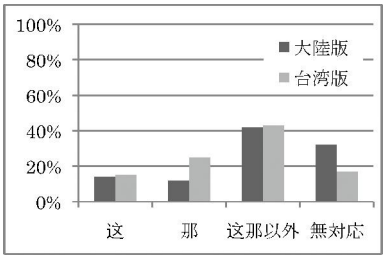
表 2　中国語訳の内訳

中国語訳の分類	これ 230（17%）		それ 1043（78%）		あれ 62（5%）	
	大陸版	台湾版	大陸版	台湾版	大陸版	台湾版
「这」	99 (43%)	130 (57%)	147 (14%)	153 (15%)	3 (5%)	1 (2%)
「那」	7 (3%)	3 (1%)	122 (12%)	261 (25%)	30 (48%)	48 (77%)
「这、那以外」	66 (29%)	74 (32%)	444 (42%)	445 (43%)	9 (15%)	4 (6%)
「無対応」	58 (25%)	23 (10%)	330 (32%)	184 (17%)	20 (32%)	9 (15%)

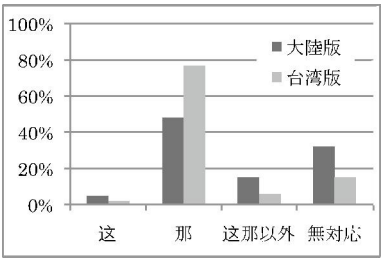
グラフ 2 「これ」の中国語訳



グラフ 3 「それ」の中国語訳



グラフ 4 「あれ」の中国語訳



訳に分けてまとめたのが表 2 およびグラフ 2～4 である。

表の括弧内は使用割合で、その算出方法は、例えば「これ」の大陸版のところをみると、指示詞「これ」は全部で 230 の用例があり、そのう

ち“这”を使って訳されているものが99例、“那”を使って訳されているものが7例、“这、那”を使わずに訳されているものが66例、対応する中国語訳がないものが58例あった。230に対し99, 7, 66, 58がそれぞれ43%、3%、29%、25%に当たることを表している。その他も同様である。

表2およびグラフ2〜4より次のようなことが分かる。

①「これ」については、“那”を使っている訳もいくつかあるが、大陸版、台湾版ともに“这”を使った訳の占める割合が一番多い。

②「あれ」については、「これ」とは逆に“那”を使った訳の割合が大陸版、台湾版ともに一番多い。

③「これ」と「あれ」を比べると、ここでは台湾版の方が大陸版より、「これ」に対しては“这”、「あれ」に対しては“那”を対応させるという傾向がはっきりしている。

④「それ」については、“这、那”の割合は「これ」や「あれ」と異なる傾向を示している。実際大陸版では「这」が14%、「那」が12%と、2ポイントの差で“这”の方が“那”よりやや多く使われている。ところが台湾版では逆に「那」が25%、「这」が15%とで、“那”の方が“这”より10ポイントも多く使われている。

⑤「这、那以外」については、大陸版、台湾版ともに「これ」で約30%、「それ」で約40%と、かなりの割合を示している。このことより日本語を中国語に訳した場合、日本語の指示詞「これ、それ」は、中国語では“这、那”で表されないものもかなり含んでいることが分かる。実際いくつか例を挙げると、他の代名詞“它、此、其、…”などを使った訳、指示対象自身を直接使った訳、“然后（それから）”や“于是（それで）”のように副詞や接続詞を使った訳、また、その後まったく音沙汰がないという意味の「それっきりよ」を“往下就没影了”と訳した用

例のように、全体として対応が認められる訳などがあった。

⑤「無対応」については、ここでは「これ」、「それ」、「あれ」ともに大陸版の割合の方が台湾版の割合よりも多くなっている。

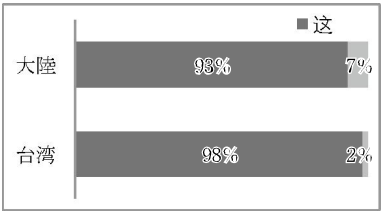
3.3「これ、それ、あれ」と“这、那”

次に中国語指示詞“这、那”を使った訳に注目し、日本語指示詞「これ、それ、あれ」に対する“这、那”の使用割合を大陸と台湾に分けて調べた。

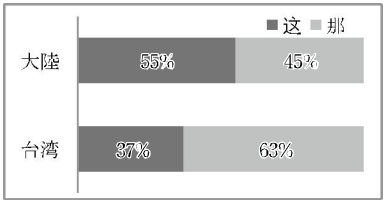
表3 「これ、それ、あれ」と“这、那”

「这」と「那」	これ		それ		あれ	
	大陸版	台湾版	大陸版	台湾版	大陸版	台湾版
「这」	99 (93%)	130 (98%)	147 (55%)	153 (37%)	3 (9%)	1 (2%)
「那」	7 (7%)	3 (2%)	122 (45%)	261 (63%)	30 (91%)	48 (98%)

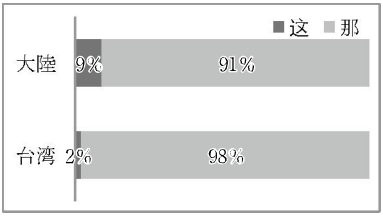
グラフ5 「これ」と“这、那”



グラフ6 「それ」と“这、那”



グラフ7 「あれ」と“这、那”



上の表2から項目「这」、「那」の部分だけを取り出して作ったのが表3で、それを棒グラフで表したのがグラフ5〜7である。表3における割合の算出方法は表2とは異なっている。例えば「これ」の大陸版の欄を見ると、“这”を使ったものが99例、“那”を使ったものが7例で、合計106例ある。106のうち99、7がそれぞれ93%、7%に当たることを示している。表3の他の欄の割合もすべてこのように算出している。

表3およびグラフ5〜7を見ると、次のようなことが分かる。

①「これ」については、“这”の使用割合が大陸版で93%、台湾版では98%と、圧倒的に“那”の使用割合よりも多い。

②「あれ」については、“那”の使用割合が大陸版で91%、台湾版では98%と、逆に“这”の使用割合よりも圧倒的に多い。

③「それ」については、大陸版では“这”が55%“那”が45%と、“这”の方が“那”より10ポイント使用割合が多いが、台湾版では“那”が63%“这”が37%と、逆に“那”の方が“这”より、26ポイント多い使用割合を示している。

大陸版と台湾版の“这、那”使用割合を比較した結果、「これ、あれ」では両版ともに同じような傾向を示している。すなわち、多少の例外はあるものの「これ」には“这”が、「あれ」には“那”がほぼ対応していると言える。ところが「それ」については、“这、那”の使用割合に対照的な傾向、つまり「大陸版では“这”の割合が多く、台湾版では“那”の割合が多い」という傾向が現れている。次節ではこの点について詳しく調べることにする。

4.「それが・それは・それを」について

前節では日本語の中称指示詞「それ」の中国語訳において、大陸版訳と台湾版訳では“这、那”の使用割合に対照的な違いが現れた。本節では「それ」のうちでも特に指示機能の比較的はっきりしている表現に的を絞って、この違いを更に詳しく調べることにする。

指示詞「それ」といっても、その中には、「それから、それに、それで、…」など、指示の働きよりもむしろ文を接続する働きをもつことばも多く含まれている。そしてそれらの中国語の訳も、「それから」に対しては“然后、还有、…”、「それに」については、“而且、再说、…”、「それで」に対しては“所以、于是…”等の、副詞や接続詞などを使って訳されているものが数多くあった。

本研究では特に日中の指示詞に注目しているので、指示詞「それ」のうち、指示機能が明確に現れる指示詞に限定して調査することにした。そこで、指示機能が明確な指示詞「それ」として取り上げたのが、「それ」のあとに助詞の「が、は、を」が付く「それが、それは、それを」の3つである。

表2の「それ」の中から、「それが、それは、それを」をすべて抜き出し、表2と同様の項目について新たに割合を算出したのが表4である。

表4から次のようなことが読み取れる。

①「这」の欄の割合を比較すると、「それが」で大陸版の方が台湾版より12ポイント多いが、「それは、それを」では逆に台湾版の方がそれぞれ1ポイント、6ポイント大陸版より多くなっている。前節の「それ」全体の調査結果では台湾版の方が大陸版より“这”の割合が多かったが、「それ」の一部である「それは」に限定すると、大陸版の“这”

表 4 「それが、それは、それを」の中国語訳

中国語訳の分類	それが 93		それは 182		それを 108	
	大陸版	台湾版	大陸版	台湾版	大陸版	台湾版
「这」	30 (32%)	19 (20%)	28 (15%)	30 (16%)	6 (5%)	12 (11%)
「那」	15 (16%)	46 (50%)	55 (29%)	98 (52%)	3 (3%)	30 (28%)
「这、那以外」	18 (20%)	2 (2%)	30 (16%)	15 (8%)	28 (26%)	15 (14%)
「無対応」	30 (32%)	26 (28%)	74 (40%)	44 (24%)	71 (66%)	51 (47%)

の割合の方が多くなることもあることが分かる。

②「那」の欄の割合は、「それが、それは、それを」において、それぞれ 34、23、25 ポイント、ここではすべて台湾版の方が大陸版より多くなっている。“那” については前節の「それ」全体における調査結果と同じ傾向を見せている。

③「这、那以外」の欄の割合では、「それが、それは、それを」において、それぞれ 18、8、12 ポイント大陸版の方がすべて多くなっている。大陸版の方が台湾版よりも、“这、那” 以外の手段も使って訳そうとする傾向が現れている。

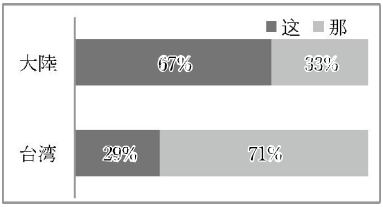
④「無対応」の欄の割合でも、「それが、それは、それを」において、それぞれ 14、16、19 ポイント、すべて大陸版の方が台湾版よりも多くなっている。特に目的語として使われる「それを」については、主語として使われた「それが」や話題として使われた「それは」に比べて省略される割合が多い。

次に、“这、那” を使った訳だけに着目してみる。表 4 から「这」、「那」の欄だけを取り出し、前節表 3 と同じ算出方法で割合を求めてつ

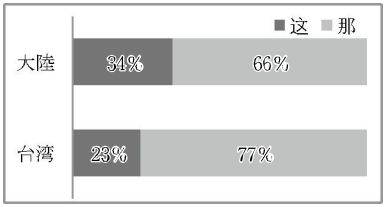
表5 「それが、それは、それを」と“这、那”の割合

「这」・「那」	それが		それは		それを	
	大陸版	台湾版	大陸版	台湾版	大陸版	台湾版
「这」	30 (67%)	19 (29%)	28 (34%)	30 (23%)	6 (67%)	12 (29%)
「那」	15 (33%)	46 (71%)	55 (66%)	98 (77%)	3 (33%)	30 (71%)

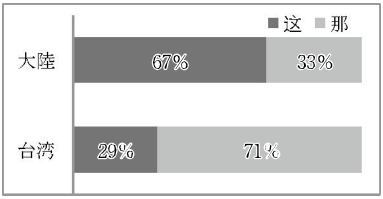
グラフ8 「それが」と“这、那”



グラフ9 「それは」と“这、那”



グラフ10 「それを」と“这、那”



くったのが表5およびグラフ8～10である

表5およびグラフ8～10を見ると、次のようなことが分かる。

①「それが、それを」については同じような傾向が現れている。すなわち、大陸版では“这”の割合が“那”の割合よりも多く、逆に台湾版では“那”の割合の方が“这”の割合よりも多い。前節表3の「それ」全体において現れた「大陸版では“这”の割合が多く、台湾版では“那”の割合が多い」という傾向が、指示詞「それ」のうちで指示機能が明確な「それが、それを」に限定したとき、なお一層はっきりと現れている。

②「それは」については大陸版、台湾版ともに、“那”の割合の方が

“这”の割合より多い。両版ともに“那”の方が多いということもあり得ることが分かる。ただし、ここでは両版ともに“这”の方が多くなることがあるかについては不明である。

③「それは」について、大陸版と台湾版の両方の“这”の割合を比べてみると、大陸版34%、台湾版23%で、大陸版の方が台湾版のよりも“这”の割合が多い。逆に“那”の割合を比べれば、必然的に台湾版77%、大陸版66%となり、台湾版の方が大陸版よりも“那”の割合が多くなっている。このように大陸版と台湾版の2つの訳を比較してみると、やはり「大陸版では“这”の割合が多く、台湾版では“那”の割合が多い」という傾向がここでも成り立っていることが分かる。そして、この傾向は「それが、それを」でも同様に成り立っている。

以上から、大陸版あるいは台湾版それぞれの訳だけを見ると、そこでは両版ともに“那”の方が“这”より多くなることもあることが分かった。しかし大陸版訳と台湾版訳の両方を比べた場合、“这”の割合は大陸版の方が多く“那”の割合は台湾版の方が多いことが、3つの場合すべてで成り立っている。

5.『東京タワー』による検証

前節では、『ノルウェイの森』において日本語指示詞「それが、それは、それを」の大陸版訳と台湾版訳とを比較したとき、“这、那”の使用割合にはっきりした違いが現れた。しかし、これはあくまでも『ノルウェイの森』だけから得られたものであり、他の小説でもこのような違いが存在するかどうかは不明である。そこで、本節では別の小説『東京タワー』を使って、『ノルウェイの森』から得られた結果を検証するこ

表6 「それが、それは、それを」の中国語訳

中国語訳の分類	それが 49		それは 114		それを 117	
	大陸版	台湾版	大陸版	台湾版	大陸版	台湾版
「这」	17 (35%)	7 (14%)	45 (39%)	13 (11%)	35 (30%)	8 (7%)
「那」	10 (20%)	16 (33%)	17 (15%)	35 (31%)	7 (6%)	7 (6%)
「这、那以外」	4 (8%)	8 (16%)	12 (11%)	4 (4%)	32 (27%)	39 (39%)
「無対応」	18 (37%)	18 (37%)	40 (35%)	62 (54%)	43 (37%)	63 (54%)

とにする。

小説『東京タワー』において、前節表4と同じ項目「それが、それは、それを」に関して調査した結果が表6である。

『東京タワー』の表6から分かることを、『ノルウェイの森』の表4と比較しながらまとめると次のようになる。

①「这」の欄をみると、3項目「それが、それは、それを」すべてにおいて、大陸版の“这”の割合が台湾版の“这”の割合より多くなっている。しかし、前節の『ノルウェイの森』では、「それが」だけにこの傾向が現れ、「それは、それを」では台湾版の“这”の割合の方が多かった。従ってこれら3項目について、どちらの版で“这”の使用割合が他方の版より多くなるかについては、作品や翻訳者の違いによって異なることのあることが分かる。

②「那」の欄をみると、3項目「それが、それは、それを」のすべてにおいて、台湾版の方が大陸版よりも多いか等しくなっている。前節の『ノルウェイの森』でもすべて台湾版の“那”の割合の方が多かった。従って“那”については“这”とは異なり、この2つ作品に関しては、

台湾版の使用割合の方が多いことが分かった。

③「这、那以外」の欄の割合を見ると、『ノルウェイの森』では「それが、それは、それを」すべてにおいて大陸版の方の割合が多かったが、ここでは「それが、それを」において台湾版の割合の方が多くなっている。従って“这、那”を使わないで訳される割合は、作品や翻訳者の違いによって大陸版の方が多かったり、台湾版の方が多くなったりすることのあることが分かる。

④「無対応」の欄の割合は、『ノルウェイの森』においては「それが、それは、それを」のすべてにおいて大陸版の方の割合が多かったが、表6では台湾版の方の割合が、3つすべてに対し等しいか多くなっている。従って、中国語に訳されない割合も、上の①や③と同様、作品や翻訳者の違いなどによって、どちらの版ももう一方の版より多くなることのあることが分かる。

更に目的語として使われた「それを」は、『ノルウェイの森』では大陸版で66%、台湾版47%で、『東京タワー』では台湾版54%（『東京タワー』は「それは」も54%）と共に高い割合を示していて、目的語として使われた「それを」が中国語に訳される際、省略されやすいことが分かる。

次に、表6より「这」、「那」の部分を取り出し、前節の表5と同様の方法で作成したのが表7およびグラフ11～13である。表7およびグラフ11～13から次のようなことが分かる。

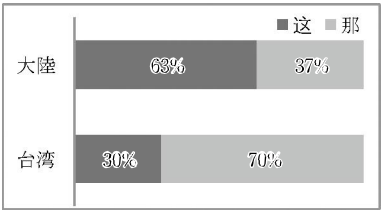
①「それが、それは」ではがどちらも同じような傾向を示している。すなわち大陸版ではどちらも“这”の割合が“那”の割合より多く、逆に台湾版では“那”の割合の方が“这”の割合よりも多くなっている。

②「それを」では大陸版、台湾版ともに“这”の割合の方が“那”の

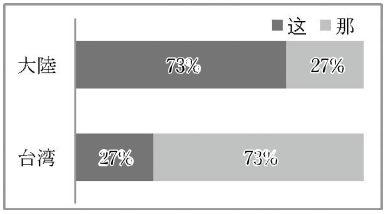
表 7 「それが、それは、それを」と“这、那”の割合

「这」と「那」	それが		それは		それを	
	大陸版	台湾版	大陸版	台湾版	大陸版	台湾版
「这」	17 (63%)	7 (30%)	45 (73%)	13 (27%)	35 (83%)	8 (53%)
「那」	10 (37%)	16 (70%)	17 (27%)	35 (73%)	7 (17%)	7 (47%)

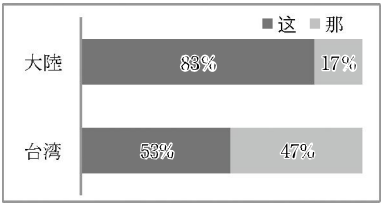
グラフ 11 「それが」と“这、那”



グラフ 12 「それは」と“这、那”



グラフ 13 「それを」と“这、那”



割合よりも多くなっている。『ノルウェイの森』の「それは」では、逆に大陸版、台湾版ともに“那”の割合の方が“这”の割合よりも多かった。従って作品や翻訳者が異なると、両版ともに“这”の割合または“那”の割合が、もう一方の割合より多くなる場合のあることが分かる。

③「それを」の大陸版と台湾版を比較すると、“这”は大陸版で 83%、台湾版が 53% で大陸版の方の割合が多く、“那”は台湾版が 47%、大陸版が 17% で台湾版の方の割合が多い。「それを」では両版ともに“这”の割合が“那”の割合より多いのであるが、それでも両版を比較した場合、大陸版の方が台湾版より“这”の割合が多く、また台湾版の方が大

陸版より“那”の割合が多い。そしてこの傾向は「それが、それは」と共に3つの場合すべてで成り立っている。

これらから、「大陸版では“这”の割合が多く、台湾版では“那”の割合が多い」という傾向が『東京タワー』でもはっきり表れていることが分かった。

6．まとめ

前節までの調査結果をまとめると次のようになる。

①日本語指示詞「これ、あれ」については、多少の例外はあるものの、大陸版、台湾版ともに「これ」については“这”が、「あれ」については“那”が対応しているといえる。

②日本語にあって中国語にない中称指示詞「それ」の中国語訳については、近称の“这”を使うか、遠称の“那”を使うかで「ゆれ」が見られる。

③『ノルウェイの森』の「それが、それを」や『東京タワー』の「それが、それは」では、大陸版で“这”が“那”より多く使われ、台湾版では逆に“那”の方が“这”より多く使われている。

④『ノルウェイの森』の「それは」では、大陸版、台湾版ともに“那”の方が“这”より多く使われ、一方『東京タワー』の「それを」では、大陸版、台湾版ともに“这”の方が“那”よりも多く使われている。従って、大陸版、台湾版の違いにかかわらず、1冊の翻訳の中で“这”が多くなるか或いは“那”が多くなるかについては、作品や翻訳者が異なれば、いずれの場合も起こり得る。

⑤『ノルウェイの森』および『東京タワー』の「それが、それは、そ

れを」について、大陸版と台湾版の２つの訳を比較すると、“这”については３つの場合とも大陸版の方が台湾版よりも多く使われ、“那”については逆に３つの場合とも台湾版の方が大陸版よりも多く使われている。従って２つの作品の中国語訳を比較した場合、やはり「大陸版では“这”の割合が多く、台湾版では“那”の割合が多い」といことが成り立っている。

この結果、日本語小説の中国語訳という点から大陸と台湾における遠近認知の違いを観察すると、大陸では台湾よりも指示対象を話し手の近くに捉える傾向があり、台湾では逆に大陸よりも話し手から遠くに捉える傾向があるといえる。

今回の調査では『ノルウェイの森』と『東京タワー』の言語データを中心に分析したが、今後さらに多くの小説やその他の言語資料に当たって検証していきたいと考えている。

テキスト

村上春樹　2006 『ノルウェイの森』（上・下） 講談社

林少华　2006 《挪威的森林》 上海译文出版社

賴明珠　2003 《挪威的森林》（上・下） 時報文化出版

リリー・フランキー　2005 『東京タワー　オカンとボクと、時々、オトン』 扶桑社

李颖秋　2007 《东京塔》 中信出版社

曹姮　2007 《東京鐵塔－老媽和我，有時還有老爸》 時報文化出版

参考文献

王亚新　2006 「ソ系指示词的指称功能与汉译」 日语研究第四辑 22-41　商务印书馆

加藤晴子　2008 「“这-”“那-”と「こ-」「そ-」「あ-」―「日中対訳コーパス」にみる対応状況―」『日中言語對照研究論集』第10号　44-56

胡俊　2005 「日本語と中国語の指示詞についての対照研究―現場指示用法の場合―」『地域政策科学研究』2 （鹿児島大学大学院人文社会研究科） 29-51

胡俊　2006 「日本語と中国語の指示詞についての対照研究―文脈指示用法の場合―」『地域政策科学研究』3 （鹿児島大学大学院人文社会研究科） 1-23

鈴木進一　2009 「明治以降における日本語指示詞研究の歴史」『人文研究』No.168 （神奈川大学） 189-237

鈴木進一　2010 「現代中国語指示詞の研究史―“这、那を中心に”―」『言語と文化論集』第16号 （神奈川大学大学院） 123-148

鈴木進一　2010 「大陸と台湾における指示詞の対照研究―“这、那の距離認識の相違について―」『日本中国語学会第60回全国大会予稿集』 357-361